英語音声のリスニングに関する事例研究
――岩手大学教育学部「英語音声学演習」における授業実践――

犬塚 博彦

1．はじめに

本稿は，筆者が岩手大学教育学部英語科で平成１５年度前期に担当した「英語音声学演習Ⅰ」において，テープに録音された英語の音声を聴いてそれを文字に書き起こすいわゆる「テープおこし」の課題に学生たちに取り組んでもらい，授業の中でのディスカションとその後提出されたレポート内容から，学生たちが英語音声を聴いて理解する際にどのような判断が働いているのかということについて考察したものである。

岩手大学教育学部では，英語音声学については学校教員養成課程中学校教育コース英語科の科目として，「英語音声学講義」（１年次後期）と「英語音声学演習Ⅰ・Ⅱ」（それぞれ２年次前期・後期）が開講されている。このうち「英語音声学演習Ⅰ」では，英語音声学の初歩を学び終えた学生たちを対象に，平成１５年度は，音声学的な知識を背景としたうえでの英語のリスニング能力の向上を図るということをその目標として設定し，英語の音声を聴いてそれを文字に書き起こす「テープおこし」を演習の中に取り入れることにした。その背景としては，聴こえてきた英語の音声を文字に直してみるという作業を実際に学生たちにしてもらうことによって，聴き取ることのできた箇所とそうではない箇所との区別がより一層明確になり，音の連続によって生じるさまざまな音声学的現象についての理解がみずからの体験を通して深まると考えたからである。そして演習の中では，間違って聴き取ってしまった箇所についてはどうしてそのように聴こえたのかということを，音声学的な視点からの解釈を交えて学生たちに報告してもらい，それをもとにディスカッションを行なった。その後，前期終了時にはそれらの内容をレポートとして形を整えて提出してもらうことにした。なお，本演習の履修者は，平成１５年度前期は８名であった。

以下本稿においてはまず，筆者の英語音声学演習の中で実施したテープおこしの概要について触れたあと，実際に学生たちが文字に書き起こしたさまざまな事例を吟味し分析することにより，その中から一般的傾向を見いだし，学生たちが英語音声を聴いて理解する際にどのような判断が働いているのかということについて考察していくことにする。

2．平成１５年度の英語音声学演習Ｉの中で実施した「テープおこし」の概要

2．1　英語の音声資料について

本章では筆者の演習の中で実施したテープおこしの概略について触れておくことにする。まず，本演習のテープおこしの対象として選定した英語の音声資料についてであるが，浅井他『英語ヒアリング特訓本』(アルク，2002)の付録 CD に収録されているものを使用させていただくことにした。浅井他(2002)は，英語リスニングに関する実践的な側面を重視して書かれた一般向けの書籍であるが，英語音声学の理論面での初歩を学び終えた学生たちにとっては，実際の英語音声に触れて音声学の基本的事項を確認したり，あるいは別の側面からとらえ直したりする意味での練習問題的な教材としてちょうどふさわしい内容であると考えて，今回活用させていただくことにしたものである。

2．2　テープおこし

本演習の目的は，前にも触れたようにあくまでも音声学的理解を踏まえた上での英語リスニング能力の向上を目ざすものなので，学生たちには音声を聴いて理解する際に，場面や前後の文脈など通常ならば意味内容を判断する際に有効となる情報が，テープおこしをする際にその影響を及ぼさないように，純粋に英語の音声そのものを聞き取ることにのみ注意を向けてもらう必要があると考えた。そこでテープおこしの素材としては，前後の文脈とは切り離した形での一つのまとまった意味内容を持つ「文」をその対象とすることにした。

次に，テープおこしをする際の留意点として学生たちに指示をしたその内容について触れておくことにする。テープおこしの作業そのものについては，対象となる音声を何度も聴き直すなどして十分に時間をかけて行なう必要があると考えたので，授業以外の時間に取り組んでもらうことにした。その際，何度聴いてみても聴こえてきた音の連続体を語レベルのまとまりとして分節することが難しいと感じる箇所については，その時の音の印象をカタカナを用いて表記し再現してもらうことにした。それも難しいような場合は，少なくともどの音がその中に含まれていたと感じたかをメモしてもらうようにした。これは，聴き取りにくいと感じる箇所を学生たちにみずから自覚してもらい，演習の中で行なうディスカションをより実りあるものにするという意味からの配慮である。

以下，次章においては，浅井他(2002)の中の 22-23 頁部分の音声資料をもとに，学生たちに取り組んでもらったテープおこしの結果を踏まえ，英語音声を聴いて理解する際に聞き手の側にどのような判断が働くのかということについて音声学的観点からみて興味深いと思われるものを選び，それを分析の対象として取りあげ考察していくことにする。

３．分析と考察

この章では，浅井他(2002)の 22-23 頁にリスニング用に掲げられている３６の英文において，英語音声学演習Ｉの履修者８名のうち，複数の学生が同じように聴き取り違えていた箇所を中心に取りあげることにする。そしてそれらをいわゆる正解となる英文と比較し，日本語を母語とする英語学習者の耳にそのように聴こえるその「わけ」を，英語の音声の特徴や日英両言語の音構造の違いを踏まえつつ考察することにしたい。なお，以下においては，正解となる英文をそれぞれの節の見出しとして掲げることにする。

３．１　Joan said that all men could come.

３．１．１　傾向

履修者８名のうち，すべての部分を正しく聞き取っていた学生はこのうちの２名であった。テープの音声では，‘Joan said…’と‘…could come.’の部分は明瞭に聴こえていたので，英文を書き起こす際にその判断が分かれたのは主に‘…said that…’と‘…all men…’の箇所が中心となった。

３．１．２　‘…said that…’

テープの音声では‘…said that…’/sɛdðət/において，‘said’の語末の/d/音(有声歯茎閉鎖音)の後に/ð/音(有声歯摩擦音)が続くことから調音位置に関する同化が生じて有声歯閉鎖音[d]となっており，かつ‘that’の語末の/t/音が破裂せずに次の音へとその調音の構えを移していることが聴いた感じから伝わってくるので，このあたりをどのように聴き取っているかということが判断の分かれ目となった。

‘…said that…’/sɛdðət/の部分のみについて言えば，３名の学生が正しく聴き取っていたのであるが，一方では‘that’の語末の/t/音が破裂していないことからこのうちの/ə/音の部分のみをとらえて‘…said a…’としたものが他に３名あった。

３．１．３　‘…all men…’

テープの音声では‘...all men...’/ɒːlmɛn/のうちの‘all’の語末の/l/音が暗い‘l’(dark‘l’)[ɫ]で調音されており「オーゥ」のように聴こえる部分を学生たちがどのように解しているかがポイントとなった。

‘...all men...’/ɒːlmɛn/をこのとおり正しく聴解できていた学生は２名のみであった。間違って聴き取っていた学生のうち，‘all ’の部分についてはこれを‘old’/ould/ととらえた学生が数のうえではそれよりも多い３名いた。これは恐らく‘all’ /ɒːl/([ɒːɫ])のうちの語末の暗い‘l’の音色から[ɒːu]のように聴き取って，

そこから類推が入って'old'/ould/と判断したものと考えられる。その時の類推についてであるが，恐らく学生たちの頭の中にある「音の記憶」に照らし合わせたときに，'all'と' men'の結びつきよりも'old'と'men'の結びつきの方がその位置づけがより高いという判断が働いたものと思われる。この他，'men' /mɛn/については，２名の学生が'man'/mæn/と書き取っており，/ɛ/と/æ/の区別も日本語を母語とする英語学習者には実際上注意を要する点であると思われる。

３．２　I think she wants us to leave.

３．２．１　傾向

テープの音声では比較的明瞭に調音されていたのであるが，すべての部分を正しく聴き取っていた学生は履修者８名のうちで３名であった。残りの５名の学生は'…wants us to…' /wɑntsəstə/の音連続のうち'us'の部分がしっかりと認識されていなかったようである。

３．２．２　'…wants us to…'

演習の中でのディスカッションでは，学生たちからの声として'wants'と'to'の間に何かが入っているようには聴こえるがそれが何であるかわからないという反応が多かった。筆者は学生たちに説明をする際に，「ワンツァスタ」のように聴こえる音連続/wɑntsəstə/を語として意味のあるまとまりごとに順に/wɑnts/('wants')と/tə/('to')に分節して示し，残りの部分が/əs/('us')であることに気づくように導いていった。もちろんこうした説明を受ければ学生たちはすぐにそれと気づくわけであるが，その背景には学生たちにとっては'wants'と'to'の間に'us'が入った/wɑntsəstə/が「音の記憶」としてはあまり馴染みがなかったのではないかということがその要因として考えられる。つまりこのケースについては英語音声を聴いて理解する際に語法の知識が必ずしも十分に生かし切れてはおらず，「音の記憶」と「語法理解の適用」との間のズレがその背景にあると言うことができるのである。

３．３　Can anyone come with me to the market?

３．３．１　傾向

テープの音声では，'Can anyone…'と'…me to the market'は明瞭に発音されていたので十分に聴き取ることができるものであって，ここでのポイントは'come with'の部分をどのように聴きとっているかということであった。正解者は２名のみであって，間違って聴き取った学生のうち'come with'の部分を'comes'と判断したものが３名あった。

3．3．2 '…come with…'

'come' /kʌm/ の語末の/m/音と 'with' /wið/ の語頭の/w/音は唇音性(labiality)を持つという点で共通性があることから，学生たちはテープの音声を書き取る際に弱形で発音されている 'with' の語頭の[w]音を十分にとらえることができず，[kʰʌmʷið]を「カムクイズ」と受け止めて，それを 'comes' と判断したものと解される。しかもここではすぐ後に/m/音が続き，子音が連続していることも，日本語を母語とする英語学習者にとっては聴き取りにくいと感じる要因の一つになっているものと思われる。

また，ここでのデータは英語の[ð]音を[z]音として受け止めている学生がいるということも同時に示しているのであるが，これは日英両言語の音体系の違いに起因するものである。ここから考えられることは，英語の音声そのものの特徴に関する微妙な違いをまだ十分に体得していない段階では，英語の音声を聴いて理解する際に，学生たちの頭の中でまだその意味内容が明晰になっていない段階すなわち語として認識できていない段階では，英語の[ð]音も[z]音も，まずはともに「ズ」を連想する音として受け止め，そしてそれによって言わんとする意味内容が語として判明した段階で，ある時はそれを/ð/音であると認識しまたある時はそれを/z/音であると認識したりするのではないかいうことが考えられるのである。

またこれと関連することであるが，学生たちが音声を聴いてそれを文字に書き起こしたものを見てみると，**Can anyone comes me to the market?*のように文法的に見て明らかに不適切ものがいくつかあって，そのように書き取った学生自身それは文として明らかに非文であることは十分に承知しているのであろうが，文字に書かれたものと音としてとらえたものとの間にあるギャップを埋め合わせる確かな手がかりがつかめないでいる状況にあるということもこれを通して明らかになったのである。

3．4 Ellen has eaten up the cake.

3．4．1 テープの音声

この文に関しては，いわゆる「正解」は皆無であった。ではなぜ学生たちにとってこの文の聴き取りが難しく感じたのか，その要因について以下において考察していくことにしたい。なお，固有名詞(人名)の 'Ellen' についてはあらかじめ学生たちにその綴り字を示しておいたことを付記しておくことにする。

まずテープの音声を音声記号で表わすと 'Ellen has eaten up the cake.' は[ɛlənəziːtnʌpðəkʰeik]となる。このうち，テープの音声の中に見出される特徴

としては，①‘has’が弱形で[əz]と発音されているということ，②‘eaten’の語末部分の/tn/で鼻腔破裂(nasal plosion)が生じ，かつこのうちの/n/音が音節主音となっているということ，③‘up’の/p/音が破裂せずに後続の‘the’へと続いているということ，の３点があげられる。ここでは音声学的に見て英語の音声の特徴を反映した内容が，標記の文中においては動詞を含めた中ほどの４語にわたって連続して表われているという点を特に指摘しておきたい。

３．４．２　分析と考察

では分析を始めるにあたってはまず，学生たちが書き起こしたものを以下に示すことにする。履修者８名のうち，何らかの形で文字に直すことのできた者が４名で，あとの４名は全く見当がつかなかったということであった。これはつまり後者については，音の連続体を意味のあるまとまりとしてどこで分節したらよいかということが判断できない状態にあったということを意味する。

【正解】Ellen has eaten up the cake.

(a) *Ellen is　not a　cake.（２名）

(b) *Ellen is　not　the cake.（１名）

(c) *Ellen　the cake.（１名）

３．４．２．１ ‘Ellen has…’

‘Ellen has…’における‘has’の部分が上に記したようにテープの音声では弱形で[əz]と発音されていたのであるが，学生たちが書き起こしたものを見ると，[əz]を‘has’の弱形であると解したものは皆無であって，これを‘is’/ɪz/と判断しているものが目立った。その背景としては，弱形で発音された時の‘has’[əz]も‘is’[ɪz]もどちらも非常によく似た聴覚上の印象を持つものなのであるが，仮に知識としてこれらを音声学の教科書等で学んでいたとしても，実際の「音の記憶」としては学生たちの頭の中にはまだ定着していなかったことがその要因であると考えられる。

ふつう聴覚上その判断がつきかねる場合，その隣接の語が聴き取れていればそこからの類推によってその判断を補完することができる。例えば，後続の‘eaten’がもし聴き取れていると仮定すれば，‘eaten’は動詞の過去分詞であって，動詞の過去分詞の前に置かれる要素ということであれば，[əz]という聴覚的印象を持つ語はその意味内容から考えて‘has’の方が妥当であるという判断も容易になるのである。ところが別項でも触れるように，‘eaten’の語末部分で鼻腔破裂が生じていて‘eaten’そのものも聴き取りが容易でないという状況の中にあっては，判断する手がかりが全く得られないために，そのことが判断をより一層難しくしている要因の一つになっていると考えられる。

3．4．2．2 '…eaten up the cake.'

学生たちの書き起こしたものを見ると，この部分に'not'という聴覚的印象を感じ取っている者が3名いたのであるが，なぜそのように聴こえたのかについて考えてみることにしたい。'eaten up'[iːtnʌp]については 3.4.1で触れたように，'eaten'の語末の/tn/で鼻腔破裂が生じ，かつこのうちの/n/音が音節主音となっているためにきこえ度(sonority)が高く，[n]音が後続の母音[ʌ]と相まって際立った印象として受け止められた可能性があるという点がまずあげられる。さらに'up'/ʌp/ の/p/音(無声両唇閉鎖音)が破裂せずに後続の'the'の/ð/音(有声歯摩擦音)の調音へと続いていることから，前者については聴覚上類似した性質を持つ[t]音があたかもそこにあるかのように感じられたものと考えることができるが，この3名はいずれも'has'を'is'と聴き取っていた学生であることにも注目しておきたい。これは'has'を'is'と誤って認識し，その誤って認識した'is'からの類推で，それに後続する可能性のある要素として学生たちの「音の記憶」の中の類似した聴覚的印象を持つものの一つとして'not'がその候補にあがったと考えられるのである。

4 まとめ

本演習で学生たちに取り組んでもらった英語音声を文字に書き起こす「テープおこし」は，音の連続体として一つの英文を聴き取ってそれを意味のあるまとまりごとに――つまり文から句へ，そして句から語へ――分節するという作業として位置づけることができる。

学生たちの聴き取りに関する間違いを見ていると，二つの型があることが判明した。一つは正しく聴き取れていない箇所が一箇所に限定される局所的な場合であり，いま一つは正しく聴き取れていない箇所が連続する複合的な場合である。

このうち，正しく聴き取れていない箇所が一箇所に限定される場合についてはさらに二つのケースが見出された。一つは語レベルのもので，語内部の音そのものを聴き取り違えているというケースである。例えば3.1.3で触れた'men'と'man'における/ɛ/音と/æ/音を聴き違えているような場合がそれであるが，これは語レベルのものであるから，その間違いがその文の理解そのものに及ぼす影響は比較的小範囲にとどまるということができる。

一方，3.3.2で触れた'come with'[kʰʌmᵊið]を'comes'/kʌmz/ととらえたケースのようにその音声のわずかな聴き取り違いであっても語の境界を越えたものついては，文理解に対しては少なからず影響を及ぼすことにはなるが，聴き取りの間違いが局所的な部分に限定される場合には，前後の要素からの類推により認

識の空白部分を補完する作用が働く余地を多分に残していると言える。これらの聴き違いの多くは英語の音構造の特徴をその背景に持つものであって，強形と弱形，同化，音の脱落など音声学的視点から説明できることが多いのであるが，この場合，聴き取ることのできるできないの分かれ目は，学生たちがその音の連続体としての聴覚印象を「音の記憶」として自身の中にもっているかどうかということが大きな要因となることが考えられる。この意味においては，本演習で行なったように，テープおこしを通して英語音声学的な論点を含む事例に数多くあたるということは意義深いことであると言えるのである。

また，正しく聴き取れていない箇所が連続するような複合的な場合においては，そもそも音の連続体を意味のあるまとまりとしてどこで分節したらよいかということが判断できない状態にあるということであって，これは3.4.2で見たようにその文全体としての理解度は著しく下がるということが明らかとなった。この場合，たとえ類推を働かせたとしてもその精度はかなり低くなってしまうということが言えるのである。

最後に，英語音声を聴いて理解する際に，聞き手である学生の側にどのような判断が働くのかということについて学生たちのレポートを通して明らかになったことをまとめておきたい。リスニングにおいては聞き手の側は「音声を聴いて理解する」という言わば受け身の立場におかれることになる。その場合，聴こえてきた音の連続体を，聞き手はそれがどのような意味をもつものなのかという観点から解析するのであるが，聞き手の頭の中にすでに蓄えられている「音の記憶」と照らし合わせてみて，一致するものがあればその段階で解析は完了し，一致しない場合は，何らかの形でそこに類推の作用が働くことになり，聴いて理解する際の空白を埋め合わせようとする。その際に判断の要素として最優先されるのは聴覚的印象の類似性の観点であって，語法としての正しさや文法的な整合性からの判断は順位としてはその後に位置づけられるものであるということが判明した。

今回，筆者が平成１５年度に担当した英語音声学演習Ｉで行なった「テープおこし」を通して英語音声を聴いて理解する際に聞き手の側にどのような判断が働いているのかについて調査し分析した結果をこれまでまとめてきたのであるが，さらに多くの事例についてまた別の機会に論じてみたいと考えている。

参考文献

浅井達夫他(2002)『英語ヒアリング特訓本』，アルク，東京.
竹林滋(1996)『英語音声学』，研究社，東京.

(岩手大学教育学部英語教育講座)